

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院学生研究
2024年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	英米文学	専攻		
研究代表者 (2025年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名				
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年		梅澤琉登				
指導教員	所属部局・職名		氏名				
	文学部・教授		舌津智之				
自然・人文・社会の別	自然	<input checked="" type="checkbox"/> 人文	社会	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人	共同	名
研究課題	19世紀中葉のアメリカ文学における人種表象						
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2025年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名				
	文学研究科・英米文学専攻・博士課程後期課程・1年		梅澤琉登				
研究期間	2024 年度						
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 60,221円 / (採択金額) 200,000円						

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

当該研究の研究目的を含むこと。

本研究は、19世紀中葉のアメリカ文学作品に注目し、奴隷制や異人種に対する、作家はもとより当時の人々の態度を思想史的な観点から明らかにする。具体的には、Edgar Allan Poe や Herman Melville、Harriett Beecher Stowe などの非白人が登場する小説や、非白人が登場しない小説であってもそこに存在する同時代の読者の人種主義的想像力を喚起させるうる表象に注目し、非文学的かつ非学問的な言説と並列的に扱うことで、作品がどのように読まれる可能性を有していたかを明らかにする。ひいては、文学作品を歴史的に文脈化することで、当時の読者の受容を再現／再考し、現代の読者に失われた読みの可能性をよみがえらせることを目的とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[奴隷制] [思想史] [インターセクショナリティ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか (できなかったのか)。
- ・何をもちて研究成果 (経過) を達成できた (できなかった) と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか (できなかったのか)。

本研究は、19 世紀中葉のアメリカ文学作品に注目し、奴隷制や異人種に対する、作家はもとより当時の人々の態度を思想史的な観点から明らかにすることを目的とし、また、文学作品を歴史的に文脈化することで、当時の読者の受容を再現／再考し、現代の読者に失われた読みの可能性をよみがえらせることを目的とした。結果としては、本年度内に研究計画で具体名を挙げた Edgar Allan Poe につき学内での研究成果報告として、Herman Melville につき学会発表として、Harriett Beecher Stowe につき査読付き学術誌への投稿として、研究成果を発表した。

まず、Edgar Allan Poe の “The Black Cat” につき、本作における猫の表象と同時代の養子が置かれた状況との象徴的類縁性を指摘したことによって、それまでは考察されてこなかった 19 世紀中葉のアメリカ人の猫と養子に対する見方の一端が明らかになったように思われる。次に、Herman Melville の “Jimmy Rose” につき、本作における貧民の表象を検討することで、同時代の福祉の制度化にまつわる悪弊を作家が認識していた可能性を指摘し、本作を歴史的に文脈化することができたように思われる。最後に、Harriett Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* につき、これまであまり顧みられてこなかった本作におけるアーントと呼ばれる黒人女性奴隷表象を分析し、奴隷であり女性でもあるという二重の苦しみ、近年インターセクショナルリティと呼ばれるものに端を発する苦しみが本作に刻まれていることを明らかにできたように思われる。

これらの研究はすべて、本学に提出済みの研究計画のなかで言及した新歴史主義批評の手法を用い、当時の人々の養子・貧者・黒人女性奴隷に対する見方の一端を、当時の新聞や雑誌などを広く渉猟することから想定し、さらにそれを補助線として、文学作品を歴史的な文脈の中に位置付けようとする試みであった。目的に掲げた、文学作品を歴史的に文脈化することで当時の読者の受容を再現／再考し、現代の読者に失われた読みの可能性をよみがえらせることは、限定的ではあるものの、達成されているように思われる。

ただし当然のことながら、ある時代のなかで出版された三作品を論じただけで当初の目標である、当時の人々の態度を思想史的な観点から明らかにすることは達成できない。したがって、具体的にその名を言及した作家以外、例えば研究計画において言及した大衆小説作家などについては、分析することはできなかった。

また、トランスベラムと呼ばれる、アメリカ史を南北戦争前後で区分けすることの拒否を通じてより通時的な研究を行おうとする態度を、本年度は実践できなかった。なぜなら、そうした研究態度は、本研究が行った分析よりも、はるかに広い歴史的知識を前提とするものであるがゆえ、現在の筆者の知見では取り組むことさえ叶わなかったからである。したがって本研究は、特定の文学作品における養子・貧者・黒人女性奴隷表象を足掛かりに、作品発表当時のそれらに対する見方の一端にしか目を向けることができなかった。

さらに、本年度分析した文学作品から筆者が引き出すことができなかった研究課題がある。それは、啓蒙主義的人種主義である。研究計画では、Léon Pliakov の *Aryan Myth* (1974) や Robert J. C. Young の *Colonial Desire: Hybridity in Theory, Culture and Race* (2002)、*Stamped from the Beginning: The Definitive History of Racist Ideas in America* (2016) を参照し、文学作品における啓蒙主義的人種主義の様相を検討するとしたが、本年度ではそうした啓蒙主義的人種主義の痕跡や傍証などを文学作品から引き出すことはできなかった。

研究成果の概要 (つづき)

・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

まず、Edgar Allan Poe の “The Black Cat” につき「2024 年度 立教大学英米文学会」において「“The Black Cat” にみる近代的家族の様相」と題して口頭発表を行った。本発表では、作家が境界攪乱的な特質を持つ猫を子供のいない夫婦の間に、一人の子供、さらに言うならば、近代的家族のなかの血縁の無い一人の養子のように配置し家庭を素描していると論じた。Poe は、自分自身 19 世紀中葉に一人の養子として生きた作家として、家庭における精神的つながり、夫婦間の親密さや親から子に注がれる慈愛の眼差しを至高のものと見做す、この時代に優勢となりつつあった言説を相対化していることと見ることができるのではないかとの見方を提示した。

次に、Herman Melville の “Jimmy Rose” につき、「第 11 回日本メルヴィル学会年次大会ワークショップ『ジミー・ローズ』を読む--テキストの豊かさを求めて」において「Jimmy Rose は客か物乞いか--救貧院をめぐる同時代意識」と題して口頭発表を行った。本発表は寄食というテーマに注目しつつ、さらにそれを当時の貧民救済を巡る問題との関連から考察し、ジミーの行動様式をヒストリサイズした。その結果、本作が極めて同時代的な恐怖、言い換えれば貧民が社会から排除されるようになった時代に貧民になることへの恐怖を刻印していると論じた。

最後に、Harriett Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* につき、「男同士の絆と女性の家事労働--*Uncle Tom's Cabin* におけるインターセクショナルリティ」と題した論考を執筆し、『アメリカ文学：日本アメリカ文学会東京支部会報』、通号 86 に掲載予定である。本論では、男性奴隷である奴隷頭と主人との関係がホモソーシャルな関係があることを指摘したうえで、アークトと呼ばれる黒人女性奴隷と女主人との間に親密な関係は見られないことに注目した。そして、作家の家政観を参照することで、本作におけるアークトらが男性から活動の領域を制限されながら、さらに自身の労働の場からも疎外されていると解釈し、本作の重要なサブテキストとして女性奴隷の解放(不)可能性とそれを誘引するインターセクショナルリティとが描かれていると論じた。

このほか、Herman Melville の *Moby-Dick; or, The Whale* や、Nathaniel Hawthorne の *The House of the Seven Gables* についても未発表だが分析を試みた。

研究計画書では、作家の周知的事実に拠ることが多い先行研究のアプローチの有効性を広く認めながらも、学際的なアプローチをとり一次資料の調査の拡張することによって、ある文学作品が成立することになる文化的・思想的土壌を明らかにしたうえで作品を再評価し、学問的・非学問的言説の中にも位置づけようとする本研究計画の試みは独創的であり、学術的な貢献をなすと考え、19 世紀中葉のアメリカ文学における人種表象を研究課題に据えた。これに照らせば、上述した本年度の成果物は研究目標の一部分を達成したことの証左になると思われる。筆者が提示した解釈や分析に対して批判的な見解があることは言うまでもないが、しかしながら、主体的に研究課題に取り組んだ結果として、学術的対話を数多の研究者と行うことができたことは事実である。他方、そうした研究目標達成の根拠は、同時に筆者の研究の射程が、当初の目標よりも小さいことを示している。あくまでも本年度に達成できたのは、研究課題の一部分にすぎず、目標に見合う十全な研究成果を残したとは言い難い。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)
- ④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

梅澤琉登、「男同士の絆と女性の家事労働——*Uncle Tom's Cabin* におけるインターセクショナルリティ」、『アメリカ文学：日本アメリカ文学会東京支部会報』、通号 86、日本アメリカ文学会東京支部編、2025 年、1-8 頁。【査読あり】

④ その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

学会発表：

梅澤琉登、「Jimmy Rose は客か物乞いか——救貧院をめぐる同時代意識」、「第 11 回日本メルヴィル学会年次大会ワークショップ『ジミー・ローズ』を読む——テキストの豊かさを求めて」、日本メルヴィル学会、2024 年 9 月 15 日開催、龍谷大学。

梅澤琉登、「“The Black Cat” にみる近代的家族の諸相」、「2024 年度立教大学英米文学会」、立教大学英米文学会、2024 年 12 月 21 日開催、立教大学。